

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520414

研究課題名(和文) 言語外情報との関係から探る省略要素の復元メカニズムの研究

研究課題名(英文) How to recover ellipstic elements in terms of extra-linsuistic information

研究代表者

奥 聡 (Oku, Satoshi)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：70224144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本語と英語それぞれにおける省略現象の復元メカニズムに関して、理論言語学(生成文法)の枠組みにおいて、比較統語論的研究を行った。特に、人間が持つ世界に関する知識とのかかわりからの復元メカニズムにおける、(非)焦点効果の機能を考慮に入れ、統語的メカニズムの解明を目指した。また、主語や目的語といった項だけではなく、副詞類の削除現象にもこの考え方を応用した。その成果は、国内外の研究誌、学会で発表した。

研究成果の概要(英文)：The current study is on the syntactic mechanism of how phonologically empty elements are semantically recovered within the theoretical framework of generative grammar. The research has revealed that (de-)focusing effect plays a crucial role in ellipsis phenomena not only of arguments but also of adjuncts. The result of the work has been presented in national/international proceedings/journals and conferences.

研究分野：言語学

キーワード：項削除 情報構造 焦点効果 項選択

1. 研究開始当初の背景

以下、研究開始当初の学術的背景を「伝統的研究土壌」「新しい分析枠組みの提供」「申請者のこれまでの研究との関連」という三つの観点からまとめて述べる。

(1) 伝統的研究土壌

①ゼロ項分析の豊かな研究史

生成文法のパラダイムでは、その初期から文構造中の発音されない要素を積極的に認めて多くの研究がなされてきた(同一名詞句削除、ゼロ代名詞、動詞句削除、移動の痕跡など: Chomsky 1965, 1975, 1981, Sag 1976 など多数)。また、主語や目的語の「省略」を比較的自由に許す文法を持った日本語を対象とした研究では、古くからゼロ代名詞を仮定した研究が行われ(Kuroda 1965)、1990年代後半からは「名詞句削除」を仮定した分析が盛んに検討されている(Oku 1998, Saito 2007, Takahashi 2008 など)。(例:「もう食べたの?」(主語・目的語ともにゼロ項))

②文外指示は統語の対象外

一方、こうした研究の多くで、ゼロ項の解釈(意味内容の復元)メカニズムに関しては、文中や先行文脈にある文中のどの要素を指すことができるか(指すことができないか)という点が検討課題の中心であり、ある(ゼロ)代名詞が文中の要素を指せない統語的条件が明らかになったあと、具体的に文外のどの要素を指示対象とするかに関しては、語用論の守備範囲であるとし、統語構造との関係に関しては積極的に検討されてきたとは言えない。

③随意的解釈のゼロ項研究は限定的

さらに、いわゆる随意的解釈のゼロ項に関しては、先行詞が義務的に決まらない「その他の場合(elsewhere case)」という「消極的定義(negative definition)」で処理され(Chomsky 1981, Borer 1989, Boeckx and Hornstein 2007 など)、研究の質・量ともに限定的なものに留まってきていた。

(2)極小主義とカートグラフィのアプローチ(新しい分析枠組みの提供)

極小主義(Chomsky 1995以降)の枠組みに移行することで、文法とその他の認知能力との関係を強く意識した研究が進められるようになった中、カートグラフィ(Rizzi 2004, Cinque 2004 など)のアプローチが、文法と言語外情報との有機的結びつきを明確な形で論じるための枠組みを提供してくれている。このことは、従来文内部の現象にのみ焦点を当ててきた(随意的解釈も含め)ゼロ項の解釈研究に、新たな視点を与え、研究を大きく推進させる可能性があると考え(先駆的研究として、Sigurdsson 2011、長谷川 2010 など)。

(3)報告者のそれまでの研究からの有機的発展

報告者は2006年以降の一連の研究で、日本語のゼロ目的語と語順交代(スクランプリング)の相互作用に着目し、文と意味解釈のインターフェイスの特性、文法と言語外情報との有機的つながりに関して、研究を進めてきた(下記「研究業績」欄参照)。その過程から、インターフェイスの視点から統語的条件と語用論的条件双方を睨みながらの研究が、日本語における随意的解釈ゼロ項の特性を明らかにする上で、重要かつ有効であるとの発想にいたり、現在萌芽的研究にも取り組み始めていた(Oku 2011を参照)。

2. 研究の目的

上記の背景のもと、本研究では、
(1)人間言語の「省略現象」における意味情報復元メカニズムを、生成文法・カートグラフィの枠組みから明らかにするという目的でプロジェクトに取り組み始めた。
(2)特に、文法と言語外の情報との結びつき方(インターフェイスの特性)に着目し、従来「その他の場合(elsewhere case)」として扱われてきた「随意的(arbitrary)」ゼロ項(発音しない名詞句)の解釈を許す構造的・語用論的条件を(特定の事物を指すゼロ項の特性と対比させながら)検討することにより、ゼロ項解釈の仕組みを解明することを目指すものであった。

・前半の2年(文献・資料の分析整理と仮説の検証=>理論構築第一段階)

文献・資料の分析整理は、主に生成文法極小主義理論におけるインターフェイスの機能に関するもの、及びゼロ代名詞の解釈に関するものを精査した。その上で、以下の二つの作業仮説を検証を行った(必要な修正を加えながら、仮説を鍛える)

作業仮説1:「随意的」解釈のゼロ項の一部は、(普遍または存在)数量詞に束縛された変項として分析できる(「その他の場合」という消極的定義から積極的特徴づけへ)

作業仮説2:主題(トピック)要素が文頭に現れる文における随意的解釈のゼロ項は、その主題要素に語用論的統制を受ける(言語外情報との有機的連携の追究)

作業仮説1は、たとえば(1a)が(1b)の解釈を与えられると分析するものであり、作業仮説2は(2a)と(2b)のゼロ主語[e]の解釈の違いを説明するものである。

- (1) a. 水がなければ、[e] 生きていけない
b. (∀x)[水がなければ、x 生きていけない]
- (2) a. 駅では、いつも[e] 新聞を売っている
([e]の随意的解釈(特定の誰かを指しているわけではない)可能)

- b. 駅では、いつも[e] そばを食べている
([e]特定の誰かを指す解釈のみ可能)

さらに、母語話者（日本語中心）からの言語資料提供も交え、仮説1と仮説2をより洗練された形で提案するところまでを、最初の2年の具体的な目標とした。

・後半の2年（汎言語的一般性の検証=>理論構築第二段階）

日本語を中心として、上記仮説1・2の検証によって得られた結果を足がかりに、他の言語のデータにも対象を広げ、文の外側の情報との関係も含めたゼロ項の、より一般的な説明原理の解明を目指した。具体的には、ゼロ主語を許す他の言語（韓国語、中国語、スペイン語、イタリア語など）のこれまでの研究（毎年出てくる新しい論文の分析・整理も含む）を精査し、下記(i)(ii)を実施していく。

(i)仮説1（最初の2年間の研究でより洗練された形にしたもの）を検証

(ii)仮説2（最初の2年間の研究でより洗練された形にしたもの）を検証

同時に、削除現象の急速な進展にともない、比較言語学的な違いの根本的な原因についての研究にも着手し始めた。この時点で、当初の研究計画にはなかった側面を有機的に加えていくことも本プロジェクトの目的の1つとなった。

3. 研究の方法

本研究は、理論構築型の経験的研究であり、その方法論は概略以下の通り。

(1)文献、資料の収集及び分析整理により、対象とする言語現象の現状と問題点を明らかにする。

(2)新たな仮説を提案し、理論的及び経験的に検証する。

(3)理論的検証においては、従来の説明と比べ、概念的簡潔さ、扱える現象の範囲、これまでにない有意義な視点を提供しているかなどを基準に考察する。

(4)経験的検証においては、母語話者の言語データ提供者の協力を得て、仮説が予測する言語事実を検証する。

(5)生成文法研究の専門家との意見交換・情報交換・ディスカッションを行い、本研究の提案を理論的・経験的により精緻なものにすることをめざす。

初年度は、関連文献及び資料の収集と先行研究のレビュー、内容の分析整理が中心におこない、特に、インターフェイスの特性を意識

したカートグラフィ研究（Rizzi 2004, Cinque 2004, Endo 2007, 長谷川 2010, Sigur?sson 2011）と、ゼロ項の認可条件・意味情報復元条件の研究(Boeckx and Hornstein 2007, Borer 1989, Epstein 1984, Chomsky 1981 など)は、これまでそれぞれ独立に行われている場合がほとんどであることから、両者の研究を連携させるという新たな視点から、論点を整理し、現状分析、問題点の整理を行う。同時に、国内の学会・研究会に出席し、専門家との意見交換を積極的に行った。

2年目以降は、基本的に平成24年度の作業を引き続き行いながら、上記「研究目的」の項で述べた二つの作業仮説の検証を、まずは日本語のデータを中心に行い、仮説をより精緻なものに練り上げていった。

同時に、国内外の学会・研究会へ出席しながら、専門家との意見交換を続けた。

3年目以降は、上記作業に加えて、以下の3つの作業も積極的に加えていった。

(i) 対象データの拡張：

対象データを日本語以外のゼロ項を許す言語にも広げ、仮説をさらに検証、必要な修正を加える。

(ii)対象現象の拡張：

対象となる現象を、通常の（発音する）代名詞にも広げ、それらの意味解釈・情報復元の仕組みが、（文・命題のレベルに留まらず）言語外情報とどのように結び付いてゆくのか、そのメカニズムをインターフェイスの特性を足がかりに追究する。

(iii) 発表及び専門家とのインターアクション：

国内外での研究発表、その時点までの成果の中間経過発表を積極的に行い、広く成果を専門家・学界に知ってもらうことにつとめる。同時に、専門家からのフィードバックを受け、意見交換を行う機会を増やし、仮説をより精緻なものに練り上げていった。

4. 研究成果

研究開始当初より、日英語の省略現象の比較統語研究が新たな局面を迎え（Saito 2007, Saito 2014 など）、申請者の研究も軌道修正をしながら進めた。その結果

(1)当初予定していたカートグラフィとの関係に関しては、十分に検討し切れなかったが、

(2)一方で、「焦点効果」の有無という概念を積極的に導入する必要があることを提案するにいたった。これは削除現象を検討する上での言語外情報との関係を考える際に、含めなければならない重要な概念であることが確認できた。

(3)さらにそこからの発展的な展開として、副

詞類など随意要素の省略可能性に関する研究に領域を広げて行くにいたった。具体的には、当初副詞類の削除現象の有無に関しては、専門家の間でも議論が分かれるところであったが、項選択の概念と同時に、焦点効果の概念をしっかりと考慮に入れることで、有効な記述の一般化がえられることが明らかになった。

(4)また、国内外での学会・研究会における専門家との議論・意見交換の場を持つことができたことは、今後の研究につながる貴重な場であり、とりわけ 2015 年 5 月の英国 Cambridge での学会は、ヨーロッパ言語における削除現象に関する最新の情報を得るとともに、東アジア言語との比較を議論することができ、今後の研究につながる大きな成果があった。具体的な成果は、下記 5 節で示すとおり、研究誌や学会で発表した。

<言及論文>

Boeckx, C. and N. Hornstein. 2007. On (Non-)Obligatory Control, in W.D.Davies and S.Dubinsky (eds.) *New Horizons in the Analysis of Control and Raising*, 251-262. Springer.

Borer, H. 1989. Anaphoric AGR, in Jaeggli, O. and K. Safir (eds.) *The Null Subject Parameter*, 69-109.

Chomsky, N. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press.

----- 1975. *Reflections on Language*. Pantheon Books.

----- 1981. *Lectures on Government and Binding*. Foris.

----- 1995. *The Minimalist Program*, MIT Press.

Cinque, G. 2004. "Restructuring" and Functional Structure, in A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond*, 132-191.

Endo, Y. 2007. *Locality and Information Structure*, John Benjamins.

Epstein, S. 1984. Quantifier-PRO and the LF Representation of PRO_{arb}, *Linguistic Inquiry* 15, 499-505.

長谷川信子 2010. CP 領域からの空主語の認可、in 長谷川信子(編)『統語論の新展開と日本語研究』, 31-65. 開拓社

Kuroda, S.Y. 1965. *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Ph.D. Dissertation. MIT.

Oku, S. 1998. A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Perspective, Ph.D. Dissertation. UConn.

----- 2011. "Arbitrary" Zero Pronouns Revisited. (a paper to be read at 143rd general meeting of The Linguistic Society of Japan).

Rizzi, L. 2004. Locality and Left Periphery, in A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond*,

223-251.

Sag, I. 1976. Deletion and Logical Form. Ph.D. Dissertation, MIT.

Saito, M. 2007. Notes on East Asian Argument Ellipsis, *Language Research* 43, 203-227.

Saito, M. 2015. Ellipsis, ms. Nanzan University.

Sigurðsson, H. Á. 2011. Conditions on Argument Drop, *Linguistic Inquiry* 42, 267-304.

Takahashi, D. 2008. Noun Phrase Ellipsis, *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 394-422.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 5 件)

①Satoshi Oku 2016. 'A Note on Ellipsis-Resistant Constituents,' *Nanzan Linguistics*, 査読なし、11 号, pp.57-70.

②奥 聡, 「「復習」: 理論言語学研究の特徴と実践」、2014. Proceedings of 86th General Meeting of the ELSJ, 査読なし、86 巻、pp.131-132.

③奥 聡, 「項削除と(非)焦点効果」、2014. Proceedings of 86th General Meeting of the ELSJ, 査読なし、86 巻、pp.119-120.

④Oku, Satoshi, 'Raffaella Folli and C. Ulbrich (eds.) 2013. Interfaces in Linguistics', *Studies in English Literature (English number)*, 査読あり、54 号、pp.147-153.

⑤Oku, Satoshi, 'Interface Economy: A Note on Markedness and Computations,' 2012. Proceedings of the 5th Formal Approach to Japanese Linguistics, 査読なし、5 号、pp.207-216.

[学会発表] (計 6 件)

①奥 聡, 「削除現象における焦点効果と項選択」、日本英文学会北海道支部第 60 回大会、2015 年 11 月 1 日、「北海道大学 (北海道、札幌)」

②奥 聡, 「削除 - 焦点効果と選択の視点から」、*Comparative Syntax and Language Acquisition #5* (招聘発表)、2015 年 6 月 27 日、「南山大学言語研究センター (愛知県、名古屋)」

③奥 聡, 「ゼロ代名詞、項削除、非焦点効果」、日本英文学会第 86 回全国大会、2014 年 5 月 14 日、「北海道大学 (北海道、札幌)」

④Oku, Satoshi、「Japanese Ellipsis Revisited: Defocusing, Remnant, and Adjuncts」、日本英語学会、2013年11月9日、「福岡大学（福岡県、福岡市）」

⑤奥 聡、「「復習」：理論言語学研究の特徴と実践」、日本英文学会北海道支部第58回大会、2013年10月7日、「北海道大学（北海道、札幌市）」

⑥奥 聡、「項削除と(非)焦点効果」、日本英文学会北海道支部第58回大会、2013年10月6日、「北海道大学（北海道、札幌市）」

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

奥 聡 (OKU, Satoshi)
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：70224144

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：